

Kappa Novels



お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。
なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 大統領の殺し屋

昭和49年4月25日 初版発行

著者 ^{かじ}梶 ^{やま}山 ^{とし}季 ^{ゆき}之
東京都新宿区市谷仲之町38
季節社ビル
出版権者・季節社
発行者 五十嵐 勝 彌
印刷者 盛 照 雄
東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347 電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © TosiYuki KaziYama 1974

(分)0-2-93(製)02247(出)2271(0)

長編推理小説

だいとうりょうのころやし
大統領の殺し屋

かじやまとしゆき
梶山季之



カッパ・ノベルス

目次

第一部

架空の国の物語

5

第二部

大統領の殺し屋

121

第三部

アンタツチャブル・ゾン
禁断地帯

243

イラストレーション

成瀬
数富

第一部

架空の国の物語



……Z国行きの定期国際便は、定刻に日本の羽田国際空港を飛び立った。

おれは、腕時計を眺め、ついで楕円形の窓から、東京の夜景に見入った。

いつも思うことだが、東京上空から俯瞰する夜景ぐらい、素晴らしいものはないと思う。

しかし、間もなく色とりどりのビーズの玉を散乱させたような夜景は遠ざかって、丸窓の外は暗黒と変わった。

雲の中に突き入ったのである。

おれは、機内に持ち込んだカバンから、推理小説を取り出して、読みだした。

禁煙のサインが消え、ついでベルト着用のサインが消える。

スチュワードと、白い制服のスチュワードが通路を歩みはじめた。

客に、飲み物の注文を訊くためだ。

おれは、いつもスコッチ・ウイスキーを銀製の瓶に入れて持ち込むことにしている。そして、コーラを頼み、その中に垂らして飲むのだ。

スコッチ・ワラーを注文すると、ツーリスト客は五十セント取られる。それがバカバカしいので考え出した生活の知恵だ。

席は、かなりあいていた。

へこの分だと、横になって寝られるな

と、おれは思った。

おれは窓側だが、通路側に、中年男がなにやら難し^{むずか}そうな書類を手にして座っている。ときどき書類に目を落とすのだが、なにかしきりに考え込んでいた。

「ふん！ 商売のことを考えてやがる」

おれはそう判断した。

年齢は五十五、六歳だろう。

日本人によくある勤勉な重役タイプだが、ときどき書類を覗き込む目付きには、サラリーマンらしからぬ鋭いものがあつた。

「この男……かつては職業軍人だったのではないだろうか？」

おれは、そんなことを空想したりした。

スチュワードが注文を訊きに來たのを幸い、おれは彼の隣りに席を移して、

「お仕事でご旅行ですか？」

と言つてみた。

すると彼は、慌てて書類をカバンに納^{しま}い込み、微笑して、

「そうです」

と答えた。

おれたちは、乾杯し、しばらく雑談した。

彼は、紅忠^{べんちゅう}という商社の重役で、ソ連のチュメニ油田開発の仕事のために、モスクワへ向かう

ところらしかった。

機内食は、まあまあだった。特に、野菜サラダが美味しかった。

メイク・ベッドの時間になり、彼は自分のほうから、書類カバンを抱えて、あいた席へと移っていった。そしてそれが、日本人・志津井との別れとなったのである。

なぜなら、彼は明け方——すでに冷たい屍しかばねとなっていたからだ。そして彼の死が発見されたのは、モスクワ着陸の二十分前である。

志津井は、どちらかというところ、筋肉質タイプだった。

にもかかわらず、彼の死因は、狭心症であるという。これは、ちょっと解げせない。

むろん、ソ連の新聞にも発表されなかったし、日本の新聞も黙殺した。

私が、そのことを知ったのは、Z国へ着いて、旧知のジャーナリストであるO・モーリに会ってからである。

モーリは、浅黒い顔をくしゃくしゃと歪ゆがめながら、

「しばらくだったな」

と言ひ、それから、

「ちょっと、聞きたいことがある」

と自分から切り出してきたのだ。

「なんだい？ 薄気味わるいな」

おれは笑った。モーリと、おれとは、かつて、国連ビルに席をおいた、新聞記者仲間なのであ

る。

「あんた……昨日、モスクワ経由の飛行機でやって来たんだろ？」

モーリは、そう訊いた。

「そのとおり」

おれは、正直に答えてやった。

「すると……その国際便の中で、ちょっとした事件があったと思うんだが」

一瞬、鋭い目をして、モーリは言った。

「さあ……ハイジャックのことか？」

おれは、わざと相手の言葉をはぐらかし、モーリの浅黒い顔を見返したものだ。

「とぼけないでほしい。日本人がひとり、殺されたはずだ」

モーリは、死んだではなく、殺されたと言ったのである。おれは耳を疑い、

「殺された、だと？」

と問い返した。

「そうだ……。志津井は、殺されたのだ」

彼は、はっきりそう言った。

「志津井？　それが、あの日本人の名か？」

おれは吃驚して問い返した。

「そうだ。彼は、日本陸軍士官学校を優秀な成績で卒業して、戦争中は参謀本部にいた。戦後、

紅忠商事に入社して、ニューヨークに勤務して……例のストロボフ事件にタッチしている」

「そりゃあ本当か！」

「嘘は言わないよ。なかなかの寝業師ねわざしでな。そんな過去の経歴をもつ人間が、ソ連の油田開発に乗りだしたんだ……。いま、Z国と日本は、そのチュメニ開発で、お互いにシノギを削けずっている」

「ふーむ、なるほど」

「そして、志津井ときみが乗った飛行機に、Z国人のイトーヤが乗っていた……」

モーリはそう言うてから、

「きみは知らないだろうが、イトーヤはZ国では有名な殺し屋なのだ。彼は、決して証拠を残さないし、警察などに、参考人として喚問されたことがない」

と教えてくれたのだ。

日本人・志津井の死因が、狭心症だと片づけられ、大会社の重役の急死が、報道されなかったことを知ったのはその直後だった。

おれは思わず唸うなって、

「そのイトーヤに会いたいな……」

と言っていた。

モーリは首をふり、

「そいつは無理な注文だろうぜ」

と肩を練めるのである。

へあの日本人は、なんだか、大切そうな書類を持っていたっけが……あれは、どうなったろうか？

おれは、そんなことを考えながら、

「イトーヤについて、知っていることを、教えてくれないか」と頭を下げた。

モーリは、手帳のページをくって、

「よし。明日の正午、このホテルへもう一度やってくる。ただし一時間そこいらしか、話せないぞ」

と、おれの肩をたたくなり、特徴あるガニ股で部屋を出て行ったのだ。

2

Z国の首都は、市の中心に、かつての国王陛下の宮廷があり、その宮殿を、青いお濠の水が取り巻いている。

おれが滞在することになったホテルの部屋は、その濠を見下ろす位置にあった。

おれは一カ月ばかりZ国を歩きまわり、異常な経済発展を遂げたZ国の、その秘密を解き明かすレポートを書くために、取材にやって来たのである。

国立中央銀行総裁をはじめ、Z国の主要な政財界人たちには、あらかじめ文書でインタビュー

を申し込み、半数ぐらいはオーケイを取ってあった。

あとは、日時の調整である。

その他、代表的な工場の見学という厄介な仕事も残っている。

だが、おれはなぜか、モーリが殺されたと断言して憚らなかつた、日本人重役のことが頭から消え失せず、すぐに活動を開始する気にならなかつた。

たとえ初対面とはいえ、共に並んでウイスキー・コークを飲み、機内食を食べて、小一時間は語り合つたのだ……。

その人物が、夜明けには、冷たくなつていたのである。

病氣ならば、スチュワーズが発見して、手当てをしただろう。

乗客は少かつたが、医師のひとりぐらひは、搭乗客の中に混じていたはずだ。

狭心症は、急死のかたちをとるが、その前に唸り声をあげると言われている。

志津井は、唸り声をあげなかつたのだろうか？ ウンとも、スンとも言わずに、天国に召されたのだろうか？

もし——もしである。

友人のO・モーリが言うように、イトーヤというプロの殺し屋の仕業だとしたら、どんな手段をとつたのだろうか。

たしか志津井は、おれに挨拶して、

「後ろのほうで、ガラガラですわね」

と言ひ、後部座席へ移っていった。

三人掛けの肘掛け^{ひじかけ}をはずすと、大人ひとりが横になれるのだ。

志津井は、通路側に頭を向けていたのだろうか。それとも窓のほうに枕をとっていたのだろうか。

毛布をかぶっていたらしいが、犯人は、志津井が寝入るのを待ち、トイレに立つときを利用したとは思えない。

だが、機内の電燈は、仮眠者のため薄暗くしてあるとはいへ、大の男が通路を往復する姿は、やはり目立つのである。

おれは、考え抜いたあげくに、

へこれは、スチュワーデスと組まねば、不可能な犯行だ……

と思ひあつた。

モーリは、正午かっきり、おれの部屋をノックした。相変わらず、時間には正確な男だつた。

モーリは、部屋に入るなり、電話でハム・サンドイッチと、水とブランデーを注文しておれに向き合ひ、

「さて、なにが聞きたい？」

と言う。無駄のない男だ。

「なんでもいい。イトーヤとは、どんな人物なんだ？ 生[＊]い立ちから話してくれ」

おれは性急に言った。

「なるほど。残念ながら、イトーヤの生い立ちにはわからない。Z国籍らしいが、純粹のZ国人ではないからだ……」

「どこに住んでいる？」

「所在は、つねに不明。この首都のどこかにいるんだろうがね」

「顔写真は？」

「Z国警察庁が、十年前、あるヤクザ者の大親分の葬儀の参列者を、ひそかにカメラで隠し撮りした。そのときの写真があるだけだ」

「その親分の名は？」

「トーセイだ。このほうの経歴は、かなり資料があるんだが」

おれはトーセイ親分の資料を、届けてくれるように頼んだ。

「よからう。ただし、明日の夕方になる」

モーリは大きく肯いて、

「このイトーヤについて、おれが関心を持ちはじめたのはだ……二年前、国立中央銀行の金庫の係員が、オギクボロスの独身寮で服毒自殺するという事件があったからよ……」

と告白したのだった。

「服毒自殺だって？」

「ああ、その男は、四年前に起きた怪事件のホシじゃないかと疑われていた男だった！」

「怪事件の犯人？」

「いや、容疑者だ」

モーリは正確に訂正して、

「知らないのか？」

と訊く。

「さあ、どんな事件なんだ？」

おれは問い返した。

「国立中央銀行から、札束が煙のように消え失せた事件だ……」

「ああ、あれか！」

おれは微笑した。

たしか日本の金にして百万円（以下、金額のみ円単位であらわす）の金が、いつのまにか紛失し、いまだに真犯人はあがっていない……という迷宮入り事件である。

おれは、記憶の糸をたぐりはじめたが、モーリは構わずに言葉をつづけて、

「その容疑者が、服毒する前々日あたりに、イトーヤと接触した気配が濃厚なんだ」

と言う。

「なぜ、それがわかる？」

おれは訊いた。

「容疑者の彼女が証言した」